

## 速読長文トレーニング（子どもへのガイダンス）

本やら、ネットなどではなにやらあやしい速読法が紹介されています。私も昔「〇〇式速読法」なんかを信じ取り組みましたが、まあだまされたものです。

つまり、そこかんたんに人は早く本を読めるようになるわけではないのかなと。

今年一年でとりこんだつもりなのは、本を早く読めるようになるというよりは、たくさん情報をすばやく目に入れ、それを素早く理解することができるようになるといった、つらく大変で地道ではありますが、確実な力をつけているというものです。そのため、2つのトレーニングを毎時間の2〜3分間で行います。

### ① 眼球トレーニング

点をおい、目をすばやく動かせるようにしてもらいます

### ② 情報処理能力

点と点をすばやく目でおい、その間に書かれている文章を理解できるようにしてもらいます

この2つだけです。素早く情報を理解できるようにになれば、おのずと速読法はみについてきます。ただし、すべての読書を早く読もうとすると、面白がなくなってしまうので、あくまで、単語の最初の数分だけ、意識をこまめに。深追いはきけません。やり過ぎはダメなのです。

では、次からは具体的な取り組み方を。

〔具体的な取り組み方〕

先生が出す、フリーズを見て素早くこたえて下さい

トンボ (大きめな紙に書いて見せます)

トンボでしたね。今、一字ずつ読みましたか？

次です

トンボがとんでいる (これまた紙に書いて見せる)

読めましたか

文字でよみましたか？

次です

トンボがとんでいたが、落ちた。

文字でよみましたか

そうです。頭の中でイメージしましたよね

そくどくとはこのように、情報を頭の中でイメージする  
こうした黙読をくりかえすことで読書のスピードがあがっていくのです。

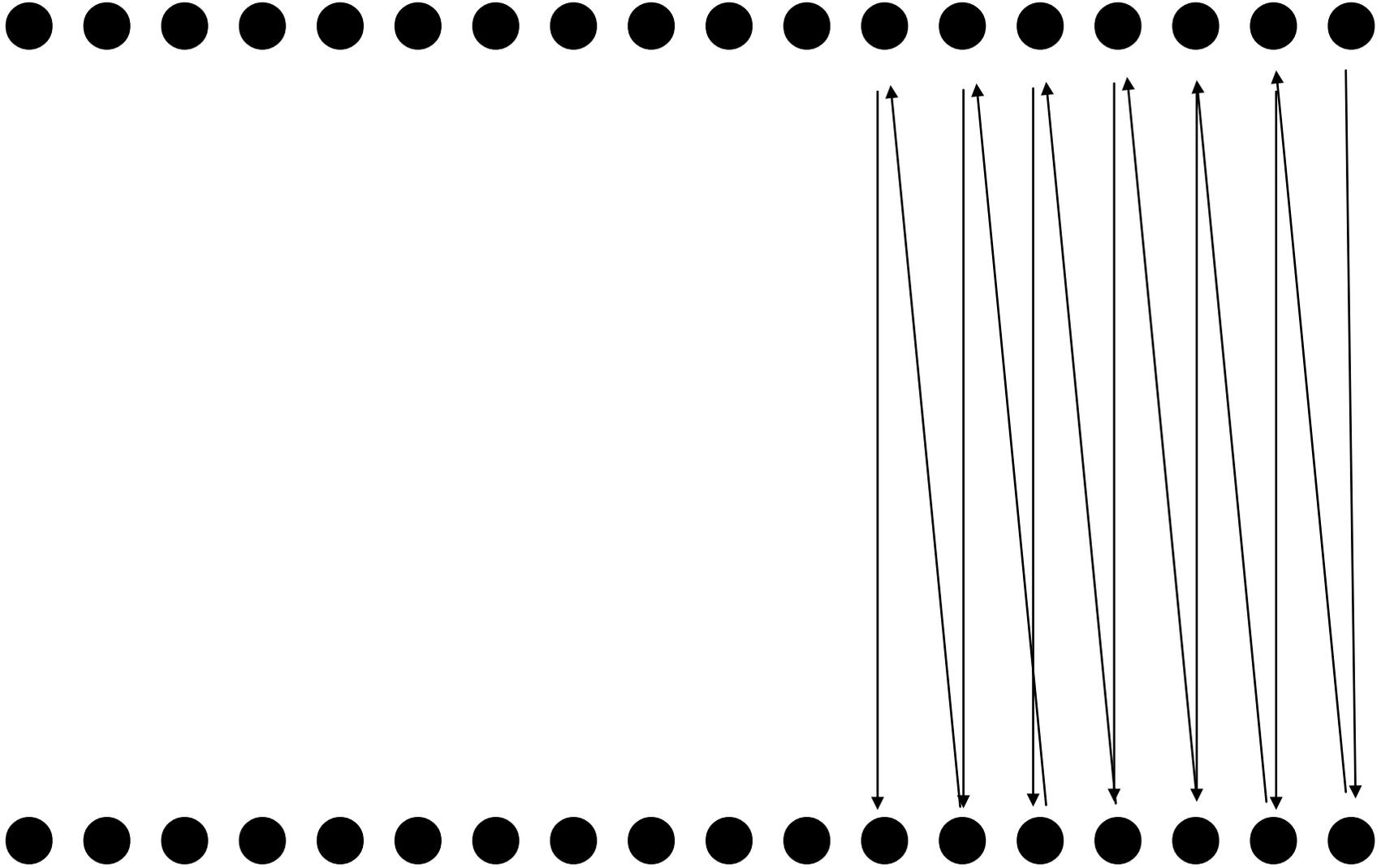
では、次に眼球トレーニング

先生が、回手をたたいたら、上の点から下の点へいき、  
素早く上の点へと目をずらします。

(手をたたく速さははじめはゆるい)

慣れてきたら、物語へとうつる。

物語も手をたたきながら読む速さを固定化するとよい。



● 昔、あるところにおじいさんが  
● 住んでいました。おじいさんは  
● 山へしばかりに行きました。  
● そこでおじいさんはなんと、  
● とても大きなキノコを、  
● 見つけたのです。よろこんだ  
● おじいさんは、いそいでキノコ  
● を家に持って帰り、ぱくぱくと  
● 全部食べてしまいました。  
● 次の日、おじいさんが起きると  
● さあ、たいへん、なんと、  
● おじいさんは、とても大きな  
● きのことになっていたのです。  
● おじいさんはかなしくなり、  
● どうしていいかわからなくなり、  
● 犬のようにワンワン泣くと、  
● はつとめがさめました。  
● そう、これはゆめだったのです